ザンジバル島の裏通りを彷徨い、カテドラル・ストリートの近くでやっと探し当てた。石畳の広場に面した白塗りの3階建て長屋風アパート。2階にテラスがある。洗濯物がカラフルにベランダを飾りたてている。右から2番目の扉に近づいてみた。

青地に白抜きで「520」のルーム・ナンバー。間違いない。ジャパニーズ・バーはここにあったのだ。扉の真上に白ペンキで塗りつぶしたプレートがある。この板には「Licensed to sell Liqueur」(酒類販売許可店)と書かれていたはずである。

なぜ、そんなことがわかるかといえば、国会図書館で見つけた白石顕二著『ザンジバルの娘子軍』(1981年刊、冬樹社)に記されているからだ。娘子軍と書いて、からゆきさんと読む。旅行者も日本企業も島の存在さえ知らぬ1920年(大正9年)代、この島に生きた女性たちがいた。

日本のどこから、どんなルートで流れてきたのか。氏の調べは克明だ。1920年、廃娼令と共にアジアの日本人娼館は続々廃館となった。シンガポールだけでも一千人の女性がいた。「ザンジバルは稼ぎになる」との評判が立ったらしい。インド洋交易で栄える島には、すでに何人か渡っていた。娘たちは貧しい農家の出だ。「二千円を仕送りできた」と聞けば、己の運命など気にも止めず、親兄弟の一粒の米を思って故郷を捨てたにちがいない。当時の千円は今の80万円以上だ。

かね、きく、こと、まき、とめ、……。熊本・天草諸島と長崎・島原半島出身の9人の女の名が明らかになっている。なぜ集中したのか。負の連鎖だ。島原・口之津港から石炭運搬船が南方へ出航していた。その船に物資のごとく積みこまれた。まきという女性は、伯母が営むシンガポールの旅館に出稼ぎし、2人してザンジバルへ。インド・ボンベイを経て900キロもの船旅である。

バーのマダムは、島原のきみ。アフリカ東岸航路「はわい丸」(大阪商船)が入港すると、日本人船員と帝国麦酒製サクラビールで乾杯して盛り上がったという。バーは1930年代まであった。第二次世界大戦開戦後、英領管理が強まると、敵国日本の痕跡は消されてゆく。

アパートに背を向けた。昔のこととはいえ、身売りの悲劇を想うのは辛い。わたしも小学校一年生は島原で送った。燦々と輝く陽光を避けて、サバの露店売りが魚をさばいていた。「買っていきなよ」とウインクする。真紅のTシャツの女性がすれ違いざま柔らかなスマイルを投げてきた。

ふと浮かんだ。もしや、彼女たちは、我々が想うほど辛く哀しい人生ではなかったのではないか、と。フレディ・マーキュリーの軽快な『輝ける七つの海』が流れてきた。ロック・シンガー・フレディもこの島の出だ。島の人たちの大らかで楽天的な気性と温かな心は今も昔も変わらない。我々日本人が知らぬ幸せの風を感じていたかもしれない。今、目の前の緑濃きマンゴーの木陰で憩う人々のように、明るく笑う娘たちの姿が浮かんでくるのである。

娘子軍のジャパニーズ・バーがあった古いアパート

裏寂れた中に、原色の美しさが…。

「さあ、買っていきなよ」と魚の露天商

森哲志(もりてつし)/ジャーナリスト。日本エッセイストクラブ会員。朝日カルチャーセンター講師(エッセー担当)。朝日新聞社社会部記者歴40年。著書に『音は遍路に立ち向かえ』('09年長崎出版)、『団塊諸君一人旅はいいぞ!』(朝日新聞社)、『不屈のプレーボール』(河出書房新社、ミズノスポーツライター賞)など。この4月には、三陸沿岸の津波被災地と放射能におびえる福島県を取材。ホームページにて、現地の動画及びルポルタージュ「津波の現場で考える」を連載中。http://www.mori-tetsu.com/